

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	『太平記』における「公家」・「武家」対比の構想：巻三十五「北野通夜物語」の情勢認識をめぐって
Author	大坪, 亮介
Citation	文学史研究. 51 巻, p.17-31.
Issue Date	2011-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

『太平記』における「公家」・「武家」対比の構想

—— 卷三十五 「北野通夜物語」の情勢認識をめぐって ——

大坪亮介

はじめに

『太平記』⁽¹⁾ 卷三十五「北野通夜物語」⁽²⁾は、北野社の通夜において、鎌倉幕府の元高官の遁世者、南朝を見限った雲客、門跡寺院の法師という三人の人物が、和・漢・天竺の説話を語って政道批判を行うという章段である。

件の「北野通夜物語」は次のように進行する。まず、遁世者が執権北条氏の善政説話を挙げて「武家」(室町幕府)を指弾し、吉野の山中で艱苦を嘗め、民の愁いを知っているはずの「宮方」(南朝)に期待を寄せる。しかし、雲客は中国の説話を語り、それとは対極にあるとして「宮方」の政道を批判する。最後に法師が、この世の乱れは「公家」の咎でも「武家」の過失でもなく、全て過去の因果に拠ると説き、例証として二つの天竺の因果譚を語る、というものである。

この流れにおいて特に注意されるのが、遁世者と雲客が「宮方」対「武家」の軸で世を捉えているのに対して、法師のみ「公家」と「武家」を対置させている点であろう。従来の研究では、この認識の相違に関心が向けられることはなく、法師の言葉に言及する際も、「公家」と「宮方」は混同されているようである。しかし、政道批判の章段に

において政治勢力の名称が曖昧に用いられているとは考え難く、この箇所は重要な問題を孕んでいるように思われる。本稿では、法師のみ「公家」と「武家」を対比的に語る点を端緒として、「北野通夜物語」で示される情勢認識が、実は『太平記』の構想と連動していることを論じようとするものである。

一 「北野通夜物語」の法師の言葉

まず最初に、「北野通夜物語」の問題の箇所を確認しておこう。遁世者と雲客が説話を語って政道批判を行った後、法師は次のように語り始める。

天下之乱ヲ情案ズルニ、公家之御禍共武家之僻事共難申。……
はじめに天下の乱れは「公家之御禍」でも「武家之僻事」でもないとの認識を示し、続いて釈迦族が過去の因果により滅亡したと説く説話(以下、釈迦族滅亡説話)と、梨軍支が阿羅漢果を得たにも関わらず過去の因果により餓死したという説話(以下、梨軍支説話)を語っていく。説話の内容自体もまた、法師の言葉と密接に関連しているのだが、その点については後述する。

さて、説話を語り終えた法師は、この世の乱れは全て過去の因果に由来すると説く。その中では、武士が栄え「公家」が困窮することに ついて言及されている。

加様の仏説ヲ以テ思フニモ、臣君ヲ編シ、子父ヲ殺スルモ、今生 一世之悪ニ非ズ。武士者飽^ニ衣食^ニ、公家ハ及^ニ餓死^ニモ、皆過去 ノ因果ニコソ候ラメ」ト語りケレバ……

これらの例から明らかなように、法師は「公家」と「武家」の対立軸で世を捉えている。しかしその一方で、法師の前に登場する遁世者と雲客は、これとは異なる見解を取っている。「武家」之世ノ治リタリシ事共ヲサゾ偲ラム」と描かれる遁世者は、有名な北条時頼の廻国説話などを語って、それとは対照的な現在の武家政権を批判し、辛酸を嘗めてきた「宮方」に期待をかける。

「……宮方^ノコソ、君モ久ク艱苦ヲ嘗テ、民ノ愁ヲ知シ食シ、臣下モササガニ有^ニ智恵^ニ人多ク候ナレバ、世ヲ治メラルベキ器用モ御渡リ候ラント、心憎クコソ存候へ」ト申セバ……

しかし、遁世者の期待に反して、雲客は次のように冷ややかに返す。

鬢帽子シタル雲客打喃咲テ、「何ヲカ心憎ク思召候ラン。宮方ノ政道モ只是ト重^ニ重^ニニテ候者ヲ。(中略)角安キ世ヲ取得スジテ、三十余年^ニ儘^ニ南山之谷ノ底ニ埋木ノ花開春ヲ知ヌ様ニテヲハスルヲ以テ、宮方^ノ之政道ヲバ思ヒ遣セ給へ」ト、爪弾ヲシテゾ語りケル。

「宮方」が世を奪い返せないことでその政道を推測して欲しいと言 い、こちらは「宮方」の政道を痛罵している。この対話からすると、遁世者と雲客は、「宮方」対「武家」の認識を示していると考えられ

る。まとめると左のようになろう。

・ 遁世者と雲客……「宮方」↕「武家」
・ 法師 ……「公家」↕「武家」

つまり、遁世者・雲客と法師とでは、世の捉え方が異なっているのである。

それでは、先行研究ではこの箇所はいかに解されているのか。遁世者・雲客と法師の間に見られる認識の違いには、これまであまり関心が払われてこなかったが、以下の研究が法師の認識について触れている。

まず、中西達治氏は、「彼(筆者注、法師)は明らかに、先の二人(筆者注、遁世者と雲客)の論争が、「公家ノ御咎」と「武家ノ僻事」という観点からなされたと考えている」と述べている。⁽³⁾ この記述からすると、「宮方」と「公家」は同じものであり、法師は、「宮方」と「武家」を対置させる遁世者・雲客と同じ認識を持つとされているようである。

また、濱崎志津子氏も、「法師は、乱世の原因は武家方や南方の咎ではなく、前世での加害者・被害者の関係が逆転して現れたと説いて、前者二人の意見を否定する」と、やはり法師が「武家方」と「南方」、つまり南朝を対置させていると捉えている。⁽³⁾

さらに、大森北義氏は、「この二人の論者——「遁世者」と「雲客」——は、北朝・武家方にも、南朝・公家方にも(君・臣)ともに人物もいなければ、政道⁽⁴⁾もないことを論じて、世の治らぬ道理⁽⁵⁾を結論として確認しているのである」と述べている。これも「公家」が南朝を指すと見なすものである。同様に石田洵氏も、「武士であっ

たと思われる遁世者が「武士ノ僻事」を述べ、貧しげな殿上人が「公家ノ御咎」を述べたものとの理解を示している。

なお、注釈書では、新潮日本古典集成の頭注が、「この第三の人（筆者注、法師）の発言は、上述の二人（筆者注、遁世者と雲客）の話を受けるのであるから、「公家」とは南朝を、「武家」とは足利幕府を指すであろう」と、「公家」が南朝を指すと解している。つまり、遁世者・雲客と法師に認識の相違は無いものとしてこの箇所を読んでいる。

このように、問題の箇所と言及した先行研究は、いずれも法師の言う「公家」を南朝と見なしている。しかし、先述のように、政道談義の章段において、政治勢力の名称が、一貫せず曖昧に用いられていると考えることには、やはり疑問が残る。

そもそも「公家」とは、「おおやけ。天皇をいい、さらに天皇を中心とする朝廷をいう」（『日本国語大辞典』第二版）。『太平記』でも朝廷を指すことは変わらないのだが、この時代は、その朝廷が南北に分裂するという特異な状況にあった。この点に留意した上で、次に『太平記』における「公家」の用例を検討していきたい。

『太平記』において、「公家」の例は多数（西源院本では五十九例）検出できるが、紙幅の都合上、以下の二例のみ掲出する。延元元年（二三三〇）八月（史実では十二月）、後醍醐天皇は足利尊氏との抗争に敗れて吉野に逃亡する。諸寺諸社が挙って吉野の後醍醐に加勢する中、根来寺だけはこれに与しなかった。

根来ノ大衆ハ一人モ吉野ヘ参ゼズ。是ハ必シモ武家ヲ鼻肩シテ、
公家ヲ背キ申ニハ非ズ。

卷十八「伝法院事」

根来寺が後醍醐に協力しなかった理由として、これは「武家」のためでも「公家」に背いたわけでもない」と語る。この箇所で見られる「公家」が後醍醐方を指していることは明白である。

次巻（巻十九）冒頭「光厳院殿重祚御事」では、吉野の後醍醐に対し、京都の光厳院が足利尊氏の推挙を受け重祚。南北朝相並ぶ時代が幕を開ける。

南北朝分裂後、最初に「公家」が用いられるのが、巻二十一巻頭に配された「蛮夷階上事」。前巻（巻二十）で新田義貞ら南朝の有力武将が、あるいは戦死し、あるいは降参したことを受け、次のように語り始める。

初ノ程コソ朝敵之名ヲ憚テ、毎事天慮ヲ仰ギ申体ニテ有シカ、
「今ハ只天下武徳ニ帰シテ、公家有テ何ノ用ニカ可立」トテ、

月卿雲客、諸司、格勤之所領者不_レ及_レ云、椒房御領マデモ、皆
武家之輩押テ領知シケル間、曲水重陽之宴モ絶ハテ、白馬踏歌
之節会モ行レズ。

卷二十一「蛮夷階上事」

初めは遠慮していた「武家」が、次第に「公家」を圧迫していったという。「公家」不要論すら唱える「武家」の押領によって宮廷行事が衰亡したという傍線部の記述からすると、ここでの「公家」は吉野の南朝ではなく、京都の北朝であると解する他ない。

右の用例の検討から明らかなように、「公家」は南北朝分裂を境として、前掲巻二十一「蛮夷階上事」以降、基本的には北朝のみを指すようになる。⁸⁾「北野通夜物語」で法師が「公家」と言う時、それは先行研究が指摘する南朝ではなく、京都の北朝を指していると考えられるのが自然であろう。とすれば、遁世者・雲客とは異なり、法師だけが「公

家」対「武家」で世を捉え、「公家」の困窮に触れている点には、重要な意味が込められているのではなからうか。

二 梨軍支説話と「貧」

ここで想起されるのが、法師が語る天竺の因果譚、なかでも二番目に引かれている梨軍支説話である。というのも、以下述べていくように、梨軍支説話において「貧」は不可欠な要素であり、「公家」の困窮に触れる法師の言葉との深い関連が窺われるからである。

説話の概要は以下の通り。便宜上、現在の出来事を記した箇所を「現在物語」と呼び、それに続く梨軍支の前世譚を「過去物語」として分けて示す。

・現在物語

天竺の婆羅門の子梨軍支は、家が貧しく飢えていた。仏弟子が乞食するのを見て出家し、阿羅漢果を得たが、貧窮であることは変わらなかった。そこで仏弟子達が梨軍支のために食を与えようと努力するも、ことごとく失敗した。梨軍支は慚愧し、砂を嘔み水を飲んで涅槃に入った。

・過去物語

釈迦は梨軍支の前世を語る。かつて波羅奈国に信心深い長者がいた。その死後、妻も同様にしていたが、息子はそれを憎み、母を監禁し餓死させた。その後息子は貧窮困苦の身となり、死後無間地獄に墮ちた。多劫の苦を経て、再び人間に生まれたのが梨軍支である。

このように、梨軍支の貧窮が過去の因果に拠ると説かれている。こ

の説話は仏典を中心として、少なからぬ文献に引用されており、これらの類話を参照することで、「北野通夜物語」の梨軍支説話における「貧」の重要性が炙り出されてくる。まずはこの説話の出典と目されている『撰集百縁経』¹¹⁾から確認しておきたい。

（梨軍支）年漸長大、遂復薄福。求索飲食、未曾得飽。（中略）母便去世。其子於後、即便命終、入阿鼻獄、受苦畢已。還生三人中、飢困如是。 卷第十「梨軍支比丘縁」

梨軍支は成長しても福分が薄く、食料を求めても飽くことがなかった。中略部分以後は梨軍支の前世の話題、つまり過去物語となる。母を餓死させた息子の末路を語り、波線部にあるように、死後地獄で苦を受けたという。

続いて、無住の『沙石集』¹²⁾の梨軍支説話を挙げる。

利軍支比丘と云ひけるは、羅漢の聖者なりけれども、あまりに貧にして、乞食すれども食を得ず。（中略）後に乞食するに得ずして、七日が間食せずして、沙を食し水を飲みて餓死ぬ。（中略）七日食を与へずして、母を干し殺したる業なり。

卷第一ノ七「神明は道心を貴び給ふ事」

傍線部のように、梨軍支は「羅漢の聖者」だったが、「あまりに貧にして」とある。この点について伊藤千賀子氏は、『沙石集』で「梨軍支を貧としていること」が、これまでの所伝と異なると指摘している。前引の『撰集百縁経』でも梨軍支は「遂復薄福」とあり、「貧」の要素が皆無ではないけれども、『沙石集』の表現は、梨軍支の「貧」を強調したものと読めるであろう。

同じ無住の『雑談集』¹⁴⁾にも梨軍支説話は引かれている。

神力(トク)ニ勝(トク)ズト云テ、昔舎利弗ノ弟子、梨軍支比丘、貧窮ノ報厚クシテ、食ヲ送ルニ路ニテ失ケリ。目連ノ神通猶不(レ)及ト云ヘリ。

第五「信智之徳事」

『沙石集』に比べると、かなり圧縮された形ではあるが、やはり梨軍支は「貧窮ノ報厚クシテ」と描かれている。さらに時代は下るものの、唱導資料の『金玉要集』⁽¹⁵⁾にも、梨軍支が「貧」であったこと、ついに餓死してしまつたことが語られる。

如來在世ニ、梨軍比丘ト云ケル人ハ、羅漢ノ聖者也ケレ共、余ニ貧シテ、乞食スレドモ不(レ)叶。七日マデ不食。々々シ(レ)砂ヲ飲水ヲ、終(レ)ニハ餓死シキ。

第九「梨軍比丘因果事」

『雑談集』、『金玉要集』のようなごく短い引用であっても、必ず梨軍支の「貧」に言及している。これらから、中世、梨軍支説話を語るに際し、「貧」は決して欠かすことの出来ない要素であつたことが看取されるであろう。そして同様の傾向は、「北野通夜物語」で法師が語る梨軍支説話にも当てはまるのである。

亦舎衛國ニ独(レ)波羅門アリ。其妻独リノ男ヲ産メリ。名ヲバ梨軍支トゾ名付ケル。(中略)梨軍支年長ジテ、家貧ク食ニ飢タリ。

(中略)食断テ七日ニ当ル時、母ハ遂ニ食ニ餓テ死ス。其後子貧窮困苦之身ト成テ、死テ無間地獄ニ墮テ……

傍線部のように、梨軍支の家庭が貧しかったという、他には見えない記述が存在する。さらに、過去物語で母を餓死させた息子は、波線部にある通り、貧窮にあえぎ死後地獄に墮ちたという。『撰集百縁経』においては、息子は「入(レ)阿鼻獄、受(レ)苦畢已」と、死後地獄で苦を受けたとあつたのが、「北野通夜物語」では、生前に「貧窮困苦之身」

になっているわけである。

「北野通夜物語」の梨軍支説話の出典については、「原典(『撰集百縁経』卷十一九十四「梨軍支比丘縁」、『大正新脩大藏経』四所収)の逐語訳に近い」との指摘がある。それでも右の比較から明らかなように、「北野通夜物語」では梨軍支の「貧」を強調するよう叙述されているのである。

このように、「北野通夜物語」の梨軍支説話において、「貧」は重要なモチーフとされている。してみると、「公家」の困窮に触れた法師の情勢認識のあり方は、彼が語る梨軍支説話の内容とも密接な関連を有するものであつた、と言えそうである。

三 釈迦族滅亡説話と「貧」

それでは、梨軍支説話の前に語られる釈迦族滅亡説話は一体いかなる意味を持つのであろうか。次にこの点が問題となろう。釈迦族滅亡説話の内容は以下の通り。梨軍支説話同様、現在物語と過去物語に分けて示す。

・現在物語

天竺の瑠璃太子は、摩竭陀国で釈氏に侮辱を受ける。復讐を誓つた太子は、長じてのち摩竭陀国に侵攻する。釈氏の大臣が太子側面に寝返つたため、釈氏は滅亡寸前にまで追い込まれる。これを憐れんだ目連は、釈尊に助けを求めたが、因果は転じがたいと言われる。そこで残つた釈氏を鉢に入れ、切利天に隠したものの、鉢の中の釈氏は皆死んでしまつた。

・過去物語

釈尊は因果を説く。かつて無熱池に摩竭魚、多舌魚がいた。漁夫が漁を行った際、多舌魚が現れ、摩竭魚らの居場所を教える代わりに命乞いをした。漁夫は多舌魚のおかげで摩竭魚らを捕らえることが出来た。その後生を替え、魚は瑠璃太子、漁夫は釈氏の刹利種、多舌魚は寝返った大臣になった。

釈迦族の滅亡が過去の因果に拠ると説く内容であり、ここからは、梨軍支説話において核となっていた「貧」の要素を汲み取ることはできない。しかし、この説話と「貧」は全く無関係なのではない。結論から先に言えば、むしろ釈迦族滅亡説話は、「貧」と極めて親和性の高い説話であったと考えられるのである。

そのことを明らかにするため、『沙石集』巻第一第七条「神明は道心を貴び給ふ事」の説話配列に注目したい。『沙石集』巻一全体の主題は、「¹¹神々に菩提心を祈り、出離生死を願うべきことを説く」というものである。第七条においてもそれは一貫しているのだが、後述のように、本条では「貧」にまつわる説話が連続しており、「貧」に多大な関心が払われているといえよう。ここで興味深いのは、その中で、釈迦族滅亡説話と梨軍支説話が、「北野通夜物語」と同じ順で語られている点である。しかも、周囲が全て日本の説話であることからして、両説話の配列は重要な意味を持つと想定される。

『沙石集』が直接『太平記』に影響を与えたとは考えがたいが、『沙石集』の例は、「北野通夜物語」の因果譚と「貧」とのつながりを探る上で有力な傍証になると思われる。そこで以下、少し煩雑ではあるが、「神明は道心を貴び給ふ事」の流れをつぶさに追っていくこと

にしたい。

本条最初の説話は、南都の学生が、道心なき故に春日明神の尊顔を拝めなかったという話。慚愧した学生は「一筋に出離の道をぞ勧めける」と、改心したことが語られる。

次の説話では、三井寺焼失の後、通夜した寺僧の夢に新羅明神が現れ、その菩提心を讃える。続く無任の評言では、今生のことを願わず菩提心を持つべきことが説かれる。その中で、「今生の事を祈り申さんば、神慮には叶はじとこそ覚ゆれ。先世の果報にて、貧福は定まりあるに」と、貧福の問題に言及する点が特に注意される。

この言葉に導かれる形で、さらに「貧」にまつわる説話が引かれる。すなわち、東塔北谷の僧が、余りの貧しさに日吉社に参詣し祈ったところ示現を蒙る。しかし彼は寄る辺を失い、西塔の南谷に移る。不審に思った僧が再び参詣したところ、先業拙く福分なしとの示現を受けたので、ついに現世のことを祈るのを諦めた、というものである。前の説話の内容を考慮すれば、この僧は「貧福は定まりある」ことを知り、現世の望みを断ち切ったと読むべきであろう。さらに、無住は次のような言葉を付す。

先業の決定して遁れ難く、仏神の力も叶はざれば、「神力、業力に勝たず」と云へり。

先業の力は仏神の力でも叶わないという。傍線部の記述は、これまでの流れからして、現世における「貧」の問題を念頭に置いたものと見なして差し支えなからう。

問題の釈迦族滅亡説話は、右の言葉を受けて語られる。釈氏が瑠璃太子に滅ばされようとした時、釈尊は神通力で助けることをせず、滅

亡が因果によると説く。終わりに釈尊は、前世で自分が魚の頭を打つたため、今頭痛がしていることを周囲に告げる。¹⁸⁾

「……我その時童子として、草の葉を以て魚の頭を打ちたりし故に、今日頭痛きなり」と仰せられて、釈尊もその日御惱ありけり。

況や凡夫の位、因果の理、逃んや。

釈尊ですら因果の影響を受けるのだから、まして凡夫は因果を免れることが出来ようか、と結ぶ。この説話が前の説話の末尾に示された、「神力、業力に勝たず」の例証であることは明らかであろう。つまり、仏神でも転じたい厳然たる因果の理を示すために、釈迦族滅亡説話は引かれていくわけである。

続く梨軍支説話では、梨軍支は阿羅漢果を得たものの、前世の因果によって餓死したと語られる。前述の通り、ここでは梨軍支の「貧」を強調している。さらに二つの天竺説話を締めくくると、¹⁹⁾「貧」を中心とした現世の苦しみに触れたものであり、「貧」が過去の因果に依るとしている。

かかる因縁なれば、貧も賤も難にも遇ひ、苦しみける事も、皆我が昔の失なり。世をも人も恨むべからず。ただ我が心を恥しめて、今より後、失無く罪無き身となつて、浄土菩提を乞ひ願ふべし。

以上の流れを参照すると、「神明は道心を貴び給ふ事」の二つの天竺説話の持つ意味が浮かび上がってくるのではなからうか。すなわち、最初の釈迦族滅亡説話では、仏神といえども動かし難い因果の理が示される。その上で、梨軍支説話では、より具体的な問題として、「貧」が過去の因果に依ると説かれる。これは「貧」という、現世における

切実な問題を因果論の立場から説明する上で、極めて理に合った配列であると言えよう。梨軍支説話の前に釈迦族滅亡説話が布置されていることには、必然性があつたと捉えるべきである。

話題を「北野通夜物語」に戻そう。法師は釈迦族滅亡説話と梨軍支説話を語った後、「武士者飽衣食、公家ハ及餓死一モ、皆過去ノ因果ニコソ候ラメ」と結んでいた。後述のように、結局この因果論は否定されていると考えられるが、釈迦族滅亡説話→梨軍支説話→因果論という流れは、右に考察した「沙石集」における両説話の語られ方に通じるものである。ここから類推すれば、「北野通夜物語」の二つの天竺説話もまた、「貧」を説明しようとするに相応しいと言えるであろう。

前章では、梨軍支説話と「貧」との関連性について言及した。さらに本章の考察によって、一見これと無関係に思われる釈迦族滅亡説話もまた、「貧」を説く際には有効な機能を持つことが確認された。¹⁹⁾従って、法師のみが言及する「公家」の「貧」は、説話も含め、彼が語る箇所全体に亘る重要なモチーフであつたと思量される。「北野通夜物語」の天竺説話は、従来個別に論じられていたけれども、むしろ釈迦族滅亡説話から梨軍支説話へと並びにこそ、重要な意味が込められていたのである。

四 構想との関わり

以上、「北野通夜物語」において、法師のみが「公家」と「武家」の対立軸で世を認識している点に着目し、彼が語る箇所では、「公家」の「貧」に大きな意味が付与されていることを明らかにした。しかし、

これは単に一章段内部の問題に留まるものではない。「北野通夜物語」周囲の展開に目を転じてみた時、法師と同様、「公家」の困窮を「武家」の富貴と対比的に捉える箇所が散見する。これは、法師の認識が、実は『太平記』の構想と連動するものであることを示唆してしよう。

右の見通しに立って、以下考察を進めていくに当たり、最初に「公家」の窮状を詳述する二つの章段の記述を掲出する。

卷三十三「飢人投身事」は、窮迫した上北面一家に降りかかる悲劇を描く。その冒頭部分に、貴族階級の窮状に関する記述が見える。

連府槐門之貴族、鏗上達部、上藹女房達ニ至マデ（中略）朝ケノ
煙絶テ後、首陽ニ死スル人多シ。 卷三十三「飢人投身事」

「首陽ニ死スル」とは、『史記』等に見える、伯夷が周に仕えることを潔しとせず、首陽山に隱棲してついに餓死を遂げたという故事に基づく。つまり、貴族であっても日々の食事にすらありつけず、命を落とす者が続出したと述べ、「公家」の困窮を叙述しているわけである。

「飢人投身事」に連続する「武家人富貴事」は、その題の通り、「武家」の富み栄える有様を批判する章段であるが、そこでも「公家」の困窮について言及されている。

公家ノ人ハ加様ニ窮困シテ、溝壑ニ墜チ道路ニ迷ヒケレ共、武家
之族ハ富貴日來ニ百倍セリ。身ニハ錦繡ヲ纏ヒ、食ニハ八珍ヲ成
ス。（中略）抑此大名達長者ノ果報有テ、自レ地財ガ涌ケルカ、自
レ天寶ガ降ケルカ。非レ降非レ涌、只寺社本所ノ所領ヲ押ヘテ取、
訴論人ノ賄賂ヲ集メタル者也。 卷三十三「武家人富貴事」

「公家」の困窮を「武家」の富貴と対比的に語り、武家に対しては、

「長者ノ果報」があったから繁栄しているのではなく、ただ寺社本所領を押し領し、裁判で賄賂を取っているからに過ぎないと、因果論を否定する形で痛烈な批判を加えている。

この箇所に関しては、「北野通夜物語」の法師の言葉との対応関係が注意される。法師は、「武士者飽衣食、公家ハ及レ餓死ニモ、皆過去ノ因果ニコソ候ラメ」と語り、法師も含めた三人は「カラ／＼」と笑う。筆者はかつて、「カラ／＼」とは優位性を表す笑いであり、「北野通夜物語」末尾では、因果論を凌駕する精神が示されている、つまり因果論は否定されていると指摘したことがある。因果論が否定されているという点においても、両章段の強い対応関係が窺われよう。

また増田欣氏は、「北野通夜物語」の法師の言葉と、前掲した卷三十三の二つの章段で描かれる時勢に関連性を見出し、さらには、梨軍支説話と時勢の転変との関係にも説き及んでいる。極めて示唆に富む指摘であるが、本稿の最初に確認した、法師のみ「公家」対「武家」で世を認識する点に着目してみた時には、卷三十三の記事だけでなく、「公家」・「武家」を対比的に語る他の箇所と「北野通夜物語」とのつながりまでが浮かび上がってくる。次にそれらの記事を確認してしよう。

卷十八「先帝吉野潛幸事」で、後醍醐天皇が吉野に逃れたという記述の後、卷十九巻頭「光厳院殿重祚御事」において、足利尊氏の推挙により光厳が重祚。朝廷は南北に分裂する。

サレバ其比物ニモ覚ヘ又田舎者共、茶ノ会酒宴之砌ニテハ、驚破ナル物語シケルモ、「アハレ此持明院殿ホド大果報ノ人コソヲハシマサバリケレ。軍ノ一度ヲモシ給ハデ、將軍ヨリ王位ヲ給ハラ

セ給ヒタリ」ト、申沙汰シケルコソヲカシケレ。

卷十九「光嚴院殿重祚御事」

傍線部のように、「持明院殿」すなわち光嚴院が尊氏から王位を授かったとの評判が立ったという。「物二モ覚ヘ又田舎者共」の発言であるとはいえ、これは京都の北朝「公家」が、その成立当初から「武家」より劣位にあることを示しており、後の「公家」の困窮と「武家」の富貴を暗示する記述であると見なせよう。

次卷(卷二十)では、新田義貞を中心とした北陸の南朝勢力の奮戦が主題となる。結局義貞は越前藤島で戦死。起死回生を図るべく、結城入道が義良親王を奉じて奥州下向を計るものの、暴風雨に阻まれて失敗に終わる。結城入道も病没し、「宮方」は甚大な損害を被る。

卷二十一巻頭「蛮夷階上事」は、こうした「宮方」の大幅な後退を受け、次のように語り起こされる。

初ノ程コソ朝敵之名ヲ憚テ、毎事天慮ヲ仰ギ申体ニテ有シカ、
「今ハ天下只武徳ニ帰シテ、公家有テ何ノ用ニカ可立」トテ、
月卿雲客、諸司、格勤之所領者不_レ及_ニ云、椒房御領マデモ、皆武
家之輩押テ領知シケル間、曲水重陽之宴モ絶ハテ、白馬踏歌之節
会モ行レズ。

卷二十一「蛮夷階上事」

先にも触れた箇所なので詳述は避けるが、前巻で宮方に大打撃を与えたことで「武家」が増長し、「公家」(北朝)を蔑ろにしていたとされる。その結果、「公家」は宮廷儀式もままならないほどの窮状に追い込まれたという。ここでは、「宮方」の大敗を語った直後に、巻を改めて「公家」と「武家」を対比するという構造を持つことに注意しておきたい。

これ以降も、新田義貞の弟である脇屋義助が、四国を平定するも急死してしまうなど、四国・中国における宮方の敗北が描かれていく。卷二十五巻頭「朝儀事」では、こうした宮方の衰亡を受け、京の人々が平和への期待を抱いたことが最初に記されている。

……四国中国之宮方漸々ニ亡シカバ、京中之百官万民、今者国衛
庄園ニ公家ノ御知行ニ成リ、正税官物モ運送之煩アラジト悦
ヘル処ニ、路次之狼藉モ猶不_レ止、本主之領知モ不_レ叶、天下只
武家之為ニ押領セラレシカバ、洛中之貴賤窮困之愁ヲ抱スト云
者ナシ。

卷二十五「朝儀事」

しかし、人々の期待とは裏腹に、「武家」の圧迫によって洛中の貴賤が困窮したという。ここでは「貴賤」とあるのみだが、傍線部よりすれば、「公家」の人々を念頭に置いた記述と見なして差し支えなからう。これも卷二十一「蛮夷階上事」と同様、前巻での宮方の敗北↓「公家」の困窮と「武家」の富貴を語るといふ流れを見て取ることができる。

その後、楠木正成の遺子正行が四條畷で討死を遂げ、勝利に乗じた幕府軍は吉野を焼討、南朝の後村上天皇は賀名生へと退却する。「宮方」に壊滅的な打撃を与えた幕府であったが、この戦闘で大功を挙げた高師直・師泰兄弟は次第に驕りを見せ始め、ついには足利尊氏の弟直義を中心とした勢力と衝突する。いわゆる観応の擾乱である。幕府内部の混乱に乗じた「宮方」は、一時的に京都を占拠するもすぐさま反撃に遭い、北朝の上皇達を伴って賀名生へと退却した。文和四年(南朝正平十年、一三五五)には、洛中での合戦で宮方は敗北を喫し、これ以後、宮方の軍勢がごく短い期間京都をおびやかすことはあつて

も、南朝の天皇は京都に迫ることもかなわなくなる。

卷三十三巻頭「三上皇自吉野御出事」では、こうしてひとまず京都の静謐が確保されたので、南朝に幽閉されていた北朝の上皇達が京都に帰還する。この直後に、先に見た「飢人投身事」と「武家人富貴事」が配されている。

〔公家〕ノ人ハ加様ニ窮困シテ、溝壑ニ墜チ道路ニ迷ヒケレ共、〔武家〕之族ハ富貴日來ニ百倍セリ。身ニハ錦繡ヲ纏ヒ、食ニハ八珍ヲ成ス。

大森北義氏は、「三上皇自吉野御出事」から「武家人富貴事」へと至る流れについて、これが卷二十六以降続いてきた「宮方」の反攻作戦の失敗を受け、「公家の没落と武家支配の浸透が一層明らかになった」ことを確認するものであると論じている。²³ ここでもやはり、「宮方」の敗北を語った後に、「公家」の困窮と「武家」の富貴を対比しているわけである。

以上の概観から、『太平記』では、南北朝分裂以降、「宮方」の打撃から「武家」と「公家」の対照的な様相を語るパターンが繰り返し出現することが理解されよう。しかも、これらの記事は、先学が既に指摘するように、武家の世へと向かう展開において、節目ともいえるべき重要な局面に布置されている。²⁴ これらを考慮するならば、「北野通夜物語」において唯一「公家」対「武家」の認識を示す法師の言葉と、「公家」の困窮を「武家」との対比において捉えたと右の記事群との間には、容易に連動性を見出すことができよう。

五 法師の認識が意味するもの

本稿冒頭で示したように、「北野通夜物語」では、遁世者と雲客が「宮方」対「武家」で世を捉えているのに対して、法師のみ「公家」と「武家」を対置させていた。それを端緒としてここまで考察を進めてきたわけであるが、ここで一つ大きな疑問が浮上してこよう。それは、遁世者・雲客と法師の認識の違いが一体何を意味するのか、ということである。

そこでまずは、前稿²⁵と若干重なる部分もあるが、遁世者から雲客へという流れが「北野通夜物語」周囲の展開と呼応している点について触れておくことにしたい。法師の発言より先に、遁世者が執権北条氏の善政説話を語って武家政権を批判した後、南朝を離脱した雲客に話を向ける箇所を見てみよう。

……宮方こそ、君モ久ク艱苦ヲ嘗テ、民ノ愁ヲ知シ食シ、臣下モサスガニ有智恵人多ク候ナレバ、世ヲ治メラルベキ器用モ御渡リ候ラント、心憎クこそ存候へ」ト申セバ、鬢帽子シタル雲客打哺咲テ、「何ヲカ心憎ク思召候ラン、……」

傍線部で遁世者が宮方への期待を述べるも、波線部のように雲客はその期待を一蹴、さらに中国の説話を語って、それとは対照的な宮方の政道を批判していくことになる。

前章で既に確認したように、「北野通夜物語」に至るまでに、「宮方」勢力は繰り返し大きな打撃を受けていた。にもかかわらず、遁世者は「宮方」に期待を抱くような発言をしており、一見したところ、この流れは不可解なように思われる。しかしながら、「北野通夜物語」に

至るまでの展開を確認してみれば、遁世者から雲客へという流れには、実は必然性のあることが理解される。巻三十四からの概観を次に示す。

①足利尊氏死後、その子義詮が將軍宣旨を受け、それに伴う南朝攻めが行われる。その際、「武家一統」の世が確認される。

(巻三十四巻頭「宰相中将殿賜將軍宣旨事」→同巻末尾)

②幕府内部の抗争が激化。

(巻三十五巻頭「南軍退治將軍以下上洛諸大名擬討仁木事」→

「京勢重天王寺下向并大樹逐電仁木没落事」)

③幕府の内紛に乗じた「宮方」の反攻が描かれる。

(巻三十五「和泉河内等城落事并畠山関東下向事」→

「山名作州発向事并北野参詣人政道雑談事」)

④巻三十五「北野通夜物語」

巻三十四巻頭「宰相中将殿賜將軍宣旨事」(①)で義詮が新將軍となったことが記され、これに伴う南朝攻撃が始まる。この南朝攻めの開始と終結を描く箇所において、「武家一統」の世が確認されることになる。しかし、その後幕府では守護大名同士の内紛が勃発(②)、「山名作州発向事并北野参詣人政道雑談事」(③)では、幕府の混乱の隙を突いて、「宮方」が反攻を企てる様子が描かれる。つまり、「北野通夜物語」の直前の章段で「宮方」の反攻が描かれているのであり、

これは、遁世者が「宮方」に期待するには相応しい展開であるといえる。²⁶⁾

また、「北野通夜物語」の鼎談は、遁世者(日本の説話を語る)↓

雲客(中国説話)↓法師(天竺説話)と進行していく。通常、三国の事柄を語る際は、仏法伝来の流れに沿った、天竺→中国→日本という順序が一般的である。「北野通夜物語」がこれとは逆の特異な構成を採っていることも、右の考察を補強するであろう。このように、「北野通夜物語」直前の展開を考慮することで、遁世者と雲客が、「宮方」と「武家」を対置させていることの意味を見出すことが可能となる。

さて、それでは肝心の法師の認識は、これといかに関わるのであろうか。この点を考える上で見逃せないのは、先に見た「北野通夜物語」までの展開の①の時点、すなわち新將軍就任に伴う南朝攻め段階で、既に揺るぎない「武家一統」の世が確認されていることである。確かに、「北野通夜物語」の直前には、「宮方」が勢力を盛り返しており、遁世者が「宮方」に期待しうる展開ではあった。しかし、もはや「武家」の世は動かしがたいものとなっていたわけである。前述のように、「公家」の「貧」について触れた法師の言葉は、「宮方」の打撃に続いて現れる、「公家」の困窮と「武家」の富貴を描く記事群に連動していると思われる。しかも、これらの記事群は、武家政権確立へと至る展開と深く関連している。このことからすれば、「宮方」と「武家」ではなく、「公家」と「武家」を対置させる法師は、微弱な抵抗は試みるものの、「宮方」がもはや「武家」を脅かせなくなった世を語る上で、むしろ的確な情勢認識を見せていると言えよう。

「北野通夜物語」本文の叙述も、このことを示唆するものである。

遁世者と雲客の語を受け、法師が語り始める箇所を思い起こしてみよう。「北野通夜物語」の無名の聞き手は、遁世者と雲客の政道論に耳を傾けていた。

(聞き手) 誠ニモト思居タル処、又是ハ内典之学匠ニテゾ有ラン
ト見ヘツル法師、ツクドト聞テ帽子打徐ケ、菩提子之数珠爪摘
テ申ケルハ、天下之乱ヲ情案ズルニ、公家之御禍共武家之僻事共
難申、只因果ノ感ズル所トコソ存候へ。

無名の聞き手は、遁世者と雲客が「宮方」対「武家」を軸として語る政道論を、「誠ニモ」と思っていた。ところが、その対話をつくづくと聞いていた法師は、このあとおもむろに「公家」と「武家」を対置させつつ自説を開陳していく。この流れは、「北野通夜物語」直前の展開と呼応した認識を示す遁世者・雲客に対して、法師は両者よりも広い視野に立った判断を下している、と捉えられるのではなからうか。とすれば、「北野通夜物語」における遁世者↓雲客↓法師という鼎談の流れは、無造作に並べられたものでは決してなく、緊密な構成意識のもと組み立てられていると考えられるのである。

おわりに

「北野通夜物語」は、その名の通り、北野社での鼎談を内容としている。そのためか、ともするとそれ自体で完結し、孤立した章段であるように見られがちであった。従来の研究において、章段末尾に提示される因果論に焦点を絞ることが多かったのも、因果論が依然大きな問題を孕んでいることに加え、本章段のそのような性質に依るところが大きいのであろう。しかし、本稿で考察したように、「北野通夜物

語」における政道談義の流れは、『太平記』の構想と連動していると思われる。

さらに「北野通夜物語」は、『太平記』第三部に出現する後醍醐天皇の怨霊記事とも密接に結びついている。その怨霊記事と本稿での指摘がいかに関わり合うかという点についても、今後検討を進めなければならぬであろう。複雑な『太平記』の世界を解き明かすためには、本章段の十全な理解が不可欠と思われる。

〈注〉

- (1) 『太平記』本文の引用は、『西源院本太平記』(鷲尾順敬校訂、刀江書院、一九三六年)に拠る。なお、文献の引用に当たっては、一部表記を私に改めた点がある。
- (2) この章段は、西源院本では「山名作州発向事并北野詣人世上雑談事」とあるが、玄玖本では「北野詣人世上雑談之事」となっている。諸本によって章段名は異なるが、本稿では「北野通夜物語」の名称を用いる。
- (3) 中西達治「太平記の思想的背景」(『太平記論序説』、桜楓社、一九八五年)。
- (4) 濱崎志津子「太平記北野通夜物語の〈因果観〉考——当代批判との関わり——」(『軍記と語り物』第二八号、一九九二年三月)。
- (5) 大森北義「太平記第三世界の構想と方法」(『太平記の構想と方法』明治書院、一九八八年)。
- (6) 石田洵「『太平記』における仁木義長——「悪」の記述態度を中心に——」(『太平記考——時と場と意識』双文社出版、二〇

○七年)。

(7) 新潮日本古典集成『太平記』五(山下宏明校注、新潮社、一九八八年)。

(8) 卷二十一以降も、「公家」が北朝を指し示さない例として、例えば卷二十七「雲景未來記事同天下怪異事」の次の例がある。羽黒の山伏雲景と老僧との間で時勢をめぐる問答が繰り広げられる中で、承久の乱後の世について老僧がこう語る。

……後鳥羽院之御謀叛ニ成テ、公家之威勢、其時ヨリ塗炭ニ落シ也。サレバ其宸襟ヲ為レ休、先朝高時ヲ失ヒ給シカ共、尚公家之代ヲバ執セ給ハヌ者也。

承久の乱以後、「公家」つまり朝廷の權威が失墜したという。そして、「先朝」後醍醐が北条高時を滅ぼしたものの、結局「公家」は世を保てなかったとある。このように、卷二十一以降であっても、「公家」が北朝を指し示さない例が存在する。しかし、それらは次の例を除いて全て、南北朝分裂以前の朝廷について言及したものである。

卷三十六「細川清氏以下南方勢京入公家武家没落事」で、楠正儀の慎重論を無視して「宮方」が京都攻略を企てる場面である。

節分以前ニ洛中之朝敵ヲ責落シテ、可レ奉レ成臨幸トテ、兵共ヲ召シケル。公家之大將ニハ二二条殿、四条中納言、武將ニハ石塔刑部卿頼房、細川相模守清氏……

ここでは、「宮方」の「二条殿、四条中納言」に対して「公家」が用いられており、例外的な記述といえる。当該箇所「公家」は「武將」と対置されており、「宮方」の軍勢を、貴族と武士に

分けたものと思われる。こうした箇所も存在するが、概して「公家」と「宮方」は使い分けられていると見て差し支えなからう。

(9) 「現在物語」「過去物語」の区分は、伊藤千賀子「レククンチカ・アヴァダーナ(梨軍支比丘)の展開と変容」(『説話文学研究』第三十九号、二〇〇四年六月)に做った。

(10) 本文で示したものの以外に、注(9)伊藤氏論文は以下の文献を挙げている。漢訳所伝として、①『法苑珠林』卷四九「不孝篇第五十五逆部第二」、②『四分律行事鈔資持記』卷下四「釈瞻病篇」。日本語所伝では、③『注好選』中十九「利群史比丘閉塞口」、④『今昔物語集』卷二・三十九「天竺ノ利群史比丘ノ語」。加えて、伊藤氏が指摘する以外に、次の文献での引用を確認できた。⑤『華嚴五教章問答抄』卷第十四下之九、⑥『資行鈔』事鈔下四之本。

(11) 引用は、『大正新脩大藏經』(大正一切経刊行会、一九二四年)に依る。

(12) 引用は、市立米沢図書館蔵本を底本とする新編日本古典文学全集『沙石集』(小島孝之校注・訳、小学館、二〇〇一年)に依る。

(13) 注(9)伊藤氏論文参照。

(14) 引用は、中世の文学『雑談集』(山田昭全・三木紀人校注、三弥井書店、一九七三年)に依る。

(15) 引用は、『磯馴帖 村雨編』(伊藤正義監修、和泉書院、二〇〇二年)に依る。

(16) 新編日本古典文学全集『太平記』四(長谷川端校注・訳、小学館、一九九八年)頭注。新編全集の底本は、特異な本文を有する

と言われる天正本だが、梨軍支説話の箇所は他本と大きな異同は見られない。

(17) 小林直樹『沙石集』における法談の基調」(『中世説話集とその基盤』和泉書院、二〇〇四年)。

(18) 釈迦の頭痛に関する箇所は、『太平記』諸本により異同がある。西源院本はこの記述を有する一方で、玄玖本・神宮徴古館本等はこの欠く。しかしながら、釈尊が因果の理を悟り、釈氏を救おうとしなかった点は共通している。

(19) 『太平記』とほぼ同時代の『夢中間答集』にも、釈迦族滅亡説話が引かれる。西山美香氏によれば、『夢中間答集』の「第一問答から第六問答までは、飢餓と信仰の問題に言及する部分」であり、該書が「そうした現実の苦への対応にせまられて」刊行されたという(『夢中間答集』における〈本朝〉」『武家政権と禪宗』笠間書院、二〇〇四年)。その第六問答には、仏菩薩の誓いにもかかわらず、なぜ祈りが叶うことは稀なのか、という問いがある。これに対し、夢窓はかつて飢餓の現場に立ち会った経験を語る。最初に「貧」をめぐる問題を挙げているわけである。さらに夢窓は、現世に執着する祈りは叶わず、仏力も業力に勝てないと説く。その後に釈迦族滅亡説話を引き、最後に業力は簡単に転じることが出来ないこと結ばれる。問答の主題は「業力」にあるが、この論理は「貧」という切実な問題を説明するためのものであり、釈迦族滅亡説話は、その例証の一つとして語られていると言える。内容自体に「貧」の要素を持たないものの、この説話と「貧」とのゆかりの深さが窺われるであろう。

(20) 例えば濱崎志津子氏は、前掲注(6)論文において、「北野通夜物語」の釈迦族滅亡説話独自の記述から、この説話が幕府の守護大名仁木義長の行状を批判するために引用されたとする。ただしこの見方については、注(22)増田氏論文による批判がある。

(21) 小秋元段氏は、「カラく」とは哄笑を示すものであり、「冗談や諷刺、放言に対して笑う声に相応しい」と述べ、誰も因果論を本気にしていないと論じている(「因果論の位相——『太平記』卷三十五「北野通夜物語」論序説——」『太平記・梅松論の研究』汲古書院、二〇〇五年)。また、筆者は「カラく」の用例分析を通じ、これが因果論を凌駕しようとする笑いであり、従って因果論は否定されていると指摘した(『太平記』北野通夜物語の構想——物語の聞き手への着眼から——」『文学史研究』第四八号、二〇〇八年三月)。

一方、樋口大祐氏は、「筆者はこの笑いは因果論に対する否定ではなく、自己相対化の笑い——有限な認識能力しか持ちえずに右往左往している自分たちを笑い笑い、いわば一種のヒューモア——であると思う。その意味で筆者は大坪論文とは異なり、直前の因果論との笑いは(さらにその後の聞き手の感想もまた)順接していると考える」との見解を示す(「転形期とヒューモア——『太平記』における死・笑い・永劫回帰」『「乱世」のエクリチュール 転形期の人と文化』森話社、二〇〇九年)。

(22) 増田欣「太平記作者の思想」(『中世文藝比較文学論考』汲古書院、二〇〇二年)。

(23) 大森北義「下剋上」時代の行方と『太平記』世界の終焉——

第三部世界「展開部」「後半」について」（『太平記』の構想と方法）（明治書院、一九八八年）。

(24) 卷二十一「蛮夷階上事」で描かれた状況について、石田洵氏は、「これらは卷二十一冒頭において作者に時代の変わり目を意識させた」と述べ、この章段を時代の変わり目を示すものと捉え、『太平記』第三部の始発をここに見ている。そして、卷二十五「朝儀事」についても、これが「四国北国の官方残存勢力が滅亡したことを認めた上で、朝儀年中行事を行う公家の衰微と対照的に、武家の天下をより強く認識せざるをえない京都の状況を描いている」として、「武家」の世となったことを示す記事と見なしている（『太平記』第二部から第三部へ——「天下時勢粧之事」をめぐって——）（『太平記考——時と場と意識』双文社出版、二〇〇七年）。

一方、小秋元段氏は、これらとは異なり、天龍寺供養記事のある卷二十五を、武家政権確立を描いた構想上の大きな区分とし、『太平記』第三部の始発を卷二十六に見ている（『太平記』第二部と「原太平記」の成立）（『太平記・梅松論の研究』汲古書院、二〇〇五年）。『太平記』を三部構成で理解するのが現在一般的であるが、第三部の始期については、中西達治氏のように、足利尊氏の將軍就任を語る卷十九からとする論もあり（『太平記の構成意識——いわゆる第三部の始期を巡る諸問題について——』『太平記の論』おうふう、一九九七年）、研究者によって見解は異なる。しかし、いずれにせよ、「公家」の困窮と「武家」の富貴を対比的に語る箇所が、これまで構想上の区分と見なされてきた、

武家の世へ向かう展開の要所で出現する点に、特に留意すべきであろう。

そうした箇所では「公家」の困窮と「武家」の富貴を対比させていることの意味については、『建武式目』の婆娑羅大名批判と、『太平記』における武家批判との間に関連性を見出す小秋元段氏の論（前掲『太平記』第一部と「原太平記」の成立）が参考になると思われる。『太平記』作者が『建武式目』に見られるような政治理念を持っていたとすれば、武家政権確立へと向かう要所において、その理念に反するような武家の振る舞いが批判されることは不自然ではない。

(25) 拙稿「万里小路藤房と『太平記』第三部世界——「武家の棟梁」をめぐって——」（『文学史研究』第五〇号、二〇一〇年三月）。

(26) 注(25) 拙稿では、章段名も「北野通夜物語」が直前の宮方蜂起と関連づけられていることを示すものと指摘した。

(27) 注(25) 拙稿では、「武家一統」は他の箇所には現れず、構想上のキーワードとして、意図的に用いられている可能性が高いことを論じている。

(28) 拙稿『『太平記』における後醍醐天皇と北野天神——「北野通夜物語」の構想——』（『国語国文』第七十七卷第十二号、二〇〇八年十二月）。